

さんのけん属をおんぶしているもの、それが果てもなく続いてたんだとお。その子どもはおびえて声をたてたら、一つ目小僧は「小わらし、声を出すでねえ。わしらの正体を見たことをだれにもいうでねえ。」そういつて葬式のような行進が始まったとお。子どもはそれについてどこまでもどこまでも歩いていったんだとお。さて部落では日ぐれになっても帰ってこないで大騒ぎとなり、みんなで手わけして山に入ったんだとお。「迷い子の迷い子の太郎やーい」「迷い子の迷い子の太郎やーい」鉦をならしたり、太鼓をたいて大声でこうよんで、どこを探してもいない。あしたになって木の根っこに眠っているのをやっと思つけたとお。子どもはそれから、七日七夜眠り続けてやっと思正気に返ったという話。だから山にはひとりでゆくもんでねえぞお。

きもだめしのはなし



むかしむかし、村の腕白小僧たちが冬の夜檀那寺に集まって、きもだめしをすることになったんだとお。まず寺の本堂の須弥壇の前に坐って、百本の百奴ローソクをともし、一つの話が終ると裏の墓地をひとめぐりして一本のローソクを消すしくみ。話は怪談づくめ。なかなか話はずんで、出るわ出るわ、化けもの一つ目小僧の話。般若面がはずれなくなった話。青鬼赤鬼やさては幽霊の話。ありとあらゆる妖怪が現われ、てそのつど消してゆく始末。墓地の新しい墓にはまだ白い旗や、そとばがあつて、まるで今にも亡者がさしまねいているような恐怖がつのる。初めは明るい本堂でのきもだめしで、威勢のよい話にはずんだが、だんだんローソクが消えてゆく。暗さが増す。ついで果てはたった一本のローソクがともっているばかりとなつたんだとお。その最後の一人が鬼火の話をして、そこに人魂がふわふわやってくるようなすこ味がでていた